

## 〈近代本論第十二回：世界史と陰謀論（ヘーゲル）〉

### 参考文献

※ヘーゲル『精神現象学』河出書房新社

※ヘーゲル『歴史哲学』岩波文庫

※ヘーゲル『法哲学』

※ジャン・イッポリット『ヘーゲル現象学の生成と構造』岩波書店

※フランシス・フクヤマ『歴史の終わり』

ペリーやハリス、オールコックやパークスが開港圧力を通じて日本に持ち込んだのは、〈文明化〉のイデオロギーだった。そのイデオロギーは、時空形式としては〈世界史〉のパラダイムに、また意味内容としては〈進化論〉（社会進化論）に規定されている。この〈世界史〉を最初にイデオロギーとして構築したのは、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル（1770～1831）だった。名前の二つにプロイセン王家の表徴が使われている（ヴィルヘルムとフリードリヒ）。それは南西ドイツ生まれの彼もまた、プロイセンによるドイツ統一を夢見はじめた〈フリッツ〉（フリードリヒ二世）の信奉者を父親として持ったからだだった。その彼のキャリアは、プロイセンの首都、ベルリンでの哲学教授としてピークを迎える。そしてそこから〈世界史〉のパラダイムを呈示し続けたのだった。

これから見るように、ヘーゲルの世界史とは、つまりヨーロッパ人の世界支配と同義であり、したがって欧米人には実にわかりやすいものだった。その分、非・ヨーロッパ人にはいまだに違和感を与え続ける（哲学史の事実にすぎなくなった今現在もそうである）。この違和感は、開国の圧力にさらされた、つまり〈文明化〉によって〈世界史〉に巻き込まれる運命にあった維新の志士たちにとっては、さらに大きかったことが予想される。重要なことはしかし、あの近代的個我の定位シンタクスにも似て、このヘーゲルのパラダイムも、その直前の〈革命〉体験から出発していたことだった。

〈革命〉以降、ヨーロッパは動乱の嵐に巻き込まれる。その内実が国家の再編を廻っていたことは、ようやくヘーゲルの中年以降に自覚されてきたことだった。そこで彼の世界史は人間の世界史であるよりもむしろ、国家の世界史となるのである。これもまたペリーやパークスを動かした世界史と同一のものであったことが確認できる。彼らもまた闘争する国家相互の力関係の上で、〈世界史〉を認識し、また〈文明化〉の使徒であろうとしたからである。つまり彼らもまた〈革命〉以降の動乱期を自己のモラル、政策の基礎として

いたということであり、これもまた当初の開港圧力にさらされた志士たちには見えにくい「向こう側の事情」でもあった。

まずしかし〈世界史〉のパラダイムの内部構造を見ておかねばならない。それはあくまでヨーロッパの世界支配のイデオロギーであったという意味で、ヨーロッパ的な〈国体論〉を生んでいくことになる。つまり植民地主義、帝国主義、奴隷制度礼賛のすべては、ヘーゲルの〈世界史〉呈示にすでに内包されているのである。そのことをまずしっかりと確認しておきたい。

ヘーゲルは（1770～1831）、形骸化の極致にあった神聖ローマ帝国の臣民として、領邦国家ヴュルテンベルク公国の首都シュトゥットガルトに生まれた。父は収税吏、母は敬虔なプロテスタント教徒である。公国は小国で、たびたびフランスとハプスブルク帝国（のちのオーストリア・ハンガリー帝国）の対立にまきこまれたが、そのおかげで、緩衝地として生き延びることができた。1485年に成立した公国の息の根をとめたのはナポレオンである（1805年）。ドイツ統一の希望は、すでにプロイセン王家に託されていたから、その王室ゆかりの名前を二つも息子につけた両親の期待も透けてみえる。

しかしこの息子は最初、フランス革命に心酔した。その後は、ドイツの政治状況に悲観し、無政府主義的な主張にかたむいたこともある。壮年におよぶと、神聖ローマ帝国を立憲君主制として再建するプランに一時熱中し、それがナポレオン戦争で終止符が打たれるのを目撃すると（〈白馬にまたがった世界精神であるナポレオン〉イエーナで目撃すると）、両親の夢に帰っていく。つまり対ナポレオン戦争をになうことで、統一ドイツの運動の中心にたちはじめた、プロイセンの集権軍事制に希望をつなぐのである。

この〈統一国家〉をめぐる、ヘーゲル自身の大きな揺れ、そして〈理論〉の変遷にまず注意しておこう。それはけっきょく彼の〈世界史〉の概念を決めていく、現実の体験だった。そしてそれは、当時の〈ものをかんがえる〉青年として、インテリとして、けっして例外的なことではなかった。オプションは山ほどあった。あるように見えた。しかしドイツの現実は四分五裂し、悲惨そのものであった。その現実から、〈精神の自己実現としての世界史〉のイデーが生まれ、それにひきつけられた青年たちが、十九世紀の〈歴史〉そのものを決めていく。マルクスもエンゲルスも、キルケゴールもその中にいた。

日本はこの近代史の激動をやや遅れて体験し、そして近代国家という理念そのものに出会うことになる。その時、その国家理念は、ヘーゲルの国家主義とマルクス主義的〈国家の死〉の左右にすでに分裂していた。前者の受容は、ビスマルクに感銘を受けた、大久保や木戸、そして伊藤たちによって進められ、後者は中江兆民のルソー紹介を嚆矢として、やがて弟子の幸徳たちが担う地場の社会主義運動を生んでいく。国家主義はすでにプロイセンの立憲君主制の中にシステム化されていたから、日本はそれをまず移植しようとし、ある程度は成功した（帝国憲法と帝国議会の成立）。しかし、ヘーゲルの国家主義も、時代の現実の中から〈生成〉してきたものであることを忘れないようにしたい。そのルーツは、フランス革命からはじまる、様々な〈オプション〉の沸騰の中で生まれた。〈世界史〉のパラダイム、つまりヘーゲルの歴史哲学もその一つの帰結である。これは哲学史の事実というよりは、十九世紀政治史、イデオロギー史の根幹の現実である。そしてそのモデル

は、すくなくともフランシス・フクヤマの『歴史の終わり』で死亡宣告がなされるまでは（ベルリンの壁の崩壊までは）、現実の〈歴史形成のポテンツ〉であった。

しかし、この死亡宣告もまたどうやら一時の現象であつたらしい。フクヤマがイデオログとして活躍した〈ネオコン〉の時期はかなり短く、民主主義の自画自賛は終わり、〈権威主義〉という美辞麗句をまとった全体主義的強権があらゆる場所で肥大増殖しているのが、われわれの政経の現実である。その混乱の中で、〈世界史〉の理念も、〈国家〉の理念も、肥大し、あるいは矮小化し、あるいは雲散霧消したかに見える。しかし事実としての政経の混乱もまた、〈歴史〉をつむいでいく。ただそれが、〈世界史〉の一枚の絵にまとまることは、おそらくもうない。〈人類史〉、あるいは〈地史〉、さらに〈宇宙史〉のほうが、われわれのこころにはるかに近い。それがなぜかということもあわせて考えてみたいのである。

原点にもどるならば、〈世界史〉のにないては、ヘーゲルによると〈国家〉である（『歴史哲学』）。それはもちろん統一国家であるから、青年から壮年までのヘーゲルは、四分五裂したドイツに、世界史に参加する資格すら認めていなかったことになる。これは啓蒙期との大きな違いだった。啓蒙期の〈歴史〉は、民族の歴史のパラダイムが台頭しつつ（ヴィーコ、ヘルダー）、基本的にはアトム的な個我の共同性である、〈世界市民〉の理念によって規定されていたからである。この代表はカントだが、啓蒙期の知識人は、その生き方を見てもわかるように、非常に国際的、学際的で、コスモポリタニズムは理念であると同時に、かれらの現実でもあった。

それが大きく変容したのは、やはりフランス革命によってである。そしてこの革命前夜に、非常に不吉な現象が生まれた。秘密結社をターゲットとした〈陰謀論〉である。それはあのイルミナーティの弾圧から始まった（1784年、バイエルン公国による検閲、解散命令の開始）。それはさらに、革命秘密結社の陰謀論、反ユダヤ主義の陰謀論を経て、現在のあのQアノンの荒唐無稽な〈あおり〉へと連続していく。これもまた原点の確認だが、どうやらこのころ（フランス革命の前夜）、近代的国家主義、秘密結社の運動、そしてその結社をターゲットとした陰謀論が同時に生まれている。アメリカでいま起きていることは、近代的国家を〈権威主義〉へとねじまげようとする勢力が、〈陰謀論〉を盛んに活用、悪用しているわけだが、この結託自体、すでにその近代的国家統一が始まろうとする時期、つまりフランス革命の前夜にはじまっていたということ、そのことがなにか大きな意味を持っていたのではないかと感じてしまうのである。

秘密結社は、文化的組織としては、ルネサンスのオカルティズムが原点にあった。それはルネサンスが中世的強権と、近世初頭の強権、特に反宗教改革と異端審問の激化（信教側には魔女狩りがあった）との端境期であったことを考えれば、その秘教性、秘匿性は不思議なことではない。しかし啓蒙期のそれは、秘教的同好会であるという面では、ルネサンス以来の伝統を継ぐものの、そこに新たに加わった要素があった。それが政治秘密結社としての側面である。これが革命の裏の水脈のようなものを形成していき、それが中間的小集団の強い系譜性を実現していくところに、近代固有の現象があった。それはともかく、まず啓蒙を標榜する集団であった。フリーメーソンがそうであるし、それから派生したイルミナーティ（1775年設立）も、〈エリートが時勢を論じるクラブ〉であったにすぎ

ない。地方の大学教授が始めたこの会は、その理想主義的な傾向と、エリート志向が当時のリベラルなインテリ、特に下級の貴族層にアピールしたらしく、急速に会員と支部を増やしていった。あのヘルダーも入会し、ゲーテすら一時関係を持った時期がある。しかしフランス革命が近づくと、そこに〈地下活動〉的な要素が加わってくる。官憲の弾圧が政教方面に及び始めたのを見た会員たちは、カトリック、特にイエズス会の弾圧陰謀を見るようになったのである。

代表的な論者に、アドルフ・クニッゲ男爵（1752～1796）という、下級貴族がいた。彼は偽名でパンフレットを書き、そこでイエズス会を告発した。ドイツの政教の抑圧は、啓蒙運動を弾圧し、あわよくばドイツ全体を再びカトリック化しようとする〈陰謀〉だというのである。それに対抗する手段は、イエズス会を「鏡のように写した」秘密結社（つまりイルミナーティ）によるしかない。しかしそれは「エリートによる啓蒙活動」でなければならない。

〈もし一つの最良の人々を集めた結社が、したがう人々を注意深く指導して、公德へと錬磨していくとする。イエズス会がその秘密の結社活動で悪意ある目的を追求するのに対し、われわれの結社は、人々をその青春のはじめから同胞への愛をはぐきみ、高潔なる、偉大なる原理原則を広めていくとする。つまり一言で言って、世界の公益のために働こうとする、もしそうするならば、達成できないことなど、はたして存在するだろうか。〉

（クニッゲ男爵〈イエズス会、フリーメーソン、および薔薇十字会について〉1780）

秘密結社と言っても、啓蒙期のクラブ、サロンの延長にすぎなかったことがすぐわかる。ともかく秘密に、こっそり集まって、こういうことを議論しようというのであるから。

しかし、イエズス会の〈陰謀〉に対抗する秘密活動が必要だと提案したのは、時代の響きであり、また非常に不吉な響きであった。ゲーテの描くフリーメーソン（『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』等）は、モーツァルトの〈魔笛〉の響きがまだするが、ここにはたしかに何かまったく異質なものが、予兆のように感得されている。

そしてたしかに、その予兆は現実となった。イルミナーティは、バイエルンの官憲によって、反政府的、反政教的（バイエルンはカトリック国だった）だとして、発禁、解散命令にあったのである。当時会員はまさに〈燎原の火のように〉広がっている最中だったので、社会全体に与えた衝撃もかなりのものだったらしい。そしてその衝撃からまもなく、フランス革命の大混乱がヨーロッパ中に広がっていくと、新たな「陰謀論」が生まれた。革命自体が、フリーメーソンとイルミナーティによって〈仕掛けられた〉ものだというのである。

これは現在の普通の常識からすると、面白いハリウッドの〈エンタメ〉でしかないように見えると思うが、フランス革命以降の現実においてはそうではなかった。十九世紀から二十世紀のボルシェビキ革命までは、〈革命の時代〉と総括されることがある（H. アレントなど）。その時代において、秘密結社のはたす実体的な役割は定方向的に増大していくのである。そしてそれに尾ヒレをつけて大衆をあおる、〈陰謀論〉もやはり、病理的な増殖を続ける。

わかるように、やはりQアノンや、〈アンティファ〉をめぐる騒動は、現代に限定された病理ではなく、長い過去を持つようなのである。

たとえば、若い頃、地方新聞の主筆をやったことのあるブルクハルトは、「2月革命前夜の当時、ありとあらゆる秘密結社を見た」と後年述べている。もちろん彼は、そうした運動そのものの喧噪に嫌気がさすたちの人だったが、それでも社会の裏側で大きく動いているものの気配、そしてそれが実体的な勢力となりつつあることを無視はできなかった。そしてまた大衆の妄想もふくらんでいく。陰謀論の妄想は、フリーメーソン、イルミネーティに並んで、アナキスト、ボルシェビキ、そして反・ユダヤ主義の核心をなす〈七人の長老による世界支配の陰謀〉を加えるようになった。二十世紀の半ばには、立派な「陰謀の一覧表」ができていたのである。

たとえば、そうした陰謀論でベストセラー作家になる人間も出てきた。ネスタ・ヘレン・ウェブスター（1876～1960）が代表格で、フランス革命時の貴族のメモワールを読んでいるうちに、ふとその貴族の生まれ変わりだという感じがしたらしい。そこでフランス革命を〈裡側から〉論ずることにした。すべてはフリーメーソンとイルミネーティの悪行だということになる。

この人はあらゆるところに陰謀ネタを見つける名人だったらしく、共産主義の陰謀、ユダヤ人の陰謀、をつぎつぎにあばき……ついに政府上層の注目をあびるまでになった。あのチャーチルがこう礼賛している。

〈このユダヤ人の運動（シオニズム）は新しいものではない。ヴァイスハウプトのスパルタクス団（イルミネーティのこと——前野）、カール・マルクスからトロツキイにいたるまで（ロシア）、ベラ・クーン（ハンガリー）、ローザ・ルクセンブルク（ドイツ）、エマ・ゴールドマン（合衆国）、これは世界中に広がる、文明転覆をはかる陰謀である。そしてそのことによって、退行した社会組織を再建し、嫉妬に満ちた悪意、実現不可能な平等、そうしたものを広めようとする。そしてその陰謀は、日々、いやましに広がっていく。この現代の作家、ウェブスター女史が熟達の筆さばきで示したごとく、おなじ陰謀がまた、フランス革命の悲劇においても、重要な要素となっていたのである。〉（ウィンストン・チャーチル〈シオニズム、ヴァーサス、ボルシェヴィズム：ユダヤ人の魂をめぐる闘争〉1920年、新聞寄稿論文）

チャーチルも、ヒトラーも、〈国際陰謀論〉を共有していた。また三文作家の〈あおり〉に容易にのせられる〈指導者〉であったことがわかる。まさにそのことに、おそらくわれわれの時代の真の〈悲惨〉も隠されているのだろう。そしてそれは超・国家主義と並立する、あるいはそれが内包する、パラノイアであった。

パラノイアなのだが、しかし実体的な現実でもある。レーニン集団も、毛集団も、すくなくともその出発点においては、著しく秘密結社の様相を呈していたからである。それはしかしもちろん〈陰謀〉のレベルではなく、すでに〈新しい国家的強権〉の建設に邁進する、そういう〈同志〉の結合体であった。かれらはたくみに、「陰謀論」が妄想する、増殖した、肥大した自己像をプロパガンダの基体として操作していくことになる。

表にはつねに強権国家がある。裏側に秘密結社があり、それが「陰謀論」と直結すると、われわれにももうなじみの世界、〈フェイク・ニュース〉と〈あおり〉の世界が広がる。

これはたしかにバロックの陰謀劇、国家転覆劇に似た世界である。ベンヤミンがそこに〈終末のアレゴリー〉を見続けたのは（『ドイツ悲劇の根源』、『パサージュ論』等）、無理もないのかもしれない。

しかし、近代国家論、国家主義は、バロックから生まれたわけではない。啓蒙的世界市民の〈批判〉から生まれたのだった。世界市民はこうして無邪気にすら見える、〈教育による世界の救済〉を説いた。たとえばあのクニッゲ男爵だが、陰謀騒ぎを無事に切り抜けるとすぐ、一冊のベストセラーを書いている。それが..ちょっと面白いのだが、社交の作法の本なのである（『人々とのつきあいかたについて』1788年初版）。この本は当時の作法を平易にまとめた本として、いまでも版を重ねている。やはり啓蒙期のサロン文化の人だったことと如実に示すアネクトドだと思う。

再びその陰謀論の原点にもどって、それと並行して勃興してくる国家主義の詳細を見ておこう。代表はここでもヘーゲルである。背景には、〈世界市民〉が地下活動化し、クニッゲたちの遊戯的な秘密結社から、愛国運動や革命運動、そして神秘主義オカルト運動まで、さまざまな結社が花盛りとなる、十九世紀の現実がある。その現実をつねに睥睨し、抑圧し続けたのが、〈近代的官憲〉だった。つまり、国家とは警察国家だったのである。明治も例外ではない。薩摩の田舎侍たちは、開化のおしきせを着るとすぐ、「おい、こら」をやりはじめる。ヘーゲルのベルリンと基本的には同じ光景だった。したがって、そのルーツにわれわれも関心をもたざるをえないのである。

ここまでを長めの前置きとして、ヘーゲルの国家哲学に含まれる二つの時代的要因、〈世界精神の実現としての世界史〉と、〈啓蒙的世界市民の否定〉を検討してみたい。

まず、ヘーゲルにおける国家主義の成立史を確認しておこう。

ナポレオンが失脚し、セントヘレナ島に流され、ウィーン体制の反動が始まってしばらくすると、プロイセンは当時名声が高まりつつあった（『大論理学』の刊行により）ヘーゲルをベルリン大学に招聘する（1818年）。これははっきりとした狙いを持った招聘だった。当時保守化が急速にすすむプロイセンの政教政策に対して、学生運動が激化していった（ブルシェンシャフト運動）。その対重として、穏健派と見なされたヘーゲルに白羽の矢が立ったのである。ヘーゲルはこの大抜擢（それはたしかに、田舎町ハイデルベルクの哲学教授にとっては大抜擢だった）に応えるかのように、『法哲学』を出版し、そこでかれの国家哲学を展開してみせた（それは表題にもかかわらず、法の哲学ではなく、国家論である）。

〈国家は理性的な意志であり、理性的な意志は、その本質からして、自由で、自己同一的存在である。理性的意志そのものである国家は、自由そのものであり、自由の実現である。……

国家は、この世界に現存し、実現される、意識にもたらされた精神である。〉（ヘーゲル『法哲学』、〈国家〉、500p）

国家と理性の等置は、ホッブズまで遡る。あの自動機械としての〈リヴァイアサン〉もまた、時計のように精密に〈技術〉が造るのだった。その機械論が生命化し、有機化しているのがこのテーゼだが、真のおどろきは国家と自由の等置である。実はこの主体と自由の〈人倫における〉等置のシンタクスそのものは、カントの『実践理性批判』で用意されていた。それこそが〈範疇的命題〉（定言命法）である。そこでは自己強制を行う理性による立法が、自由と直結されていたのだった。

しかし国家が〈臣民〉に実定法で強制を行う時、それが〈国家の自由〉であるとしても〈臣民〉はどこにその〈自由〉の根拠を認めることができるのだろうか。それはもはや自らの裡にはないのだから（国家は〈市民〉を超越しているから）、自由は国家の裡にしかない。ここでは国家有機体が、化け者のような容貌を呈しはじめている。ホッブズはまだ冷静に、この怪物自同体を〈リヴァイアサン〉と呼んだ。ヘーゲルは〈理性〉と呼ぶ。この用語の錯乱はどこからきているのだろうか（それは、厳密な意味での錯乱である）。

こうして主体化（擬制ではない）された国家は、実定法すべての根拠となる。

〈国家は、第二の自然であり、意志にもとづいて現実を理性的に動かそうとするものであって、この精神的現実のうちに本来ふくまれている理性的な内実が、法律の形で現象しなければならない。〉（ヘーゲル『法哲学』〈緒言〉）

これは啓蒙期のルソーたちの〈自然法〉を意識した定義で、一見して、理性と意志（国家定立の意志）の連結を呈示しているのだから、それ自体、それほど奇異には響かない。しかし問題は、理性的内実＝法律という等置にあった。立法主体となった国家を抑止する原理はどこにあるのかと問いを立ててみると、この主張の〈ラディカリズム〉が目立ち始める。

この理性主体である国家は、君主制でなければならない（プロイセン王国のように）。なぜなら、一人の君主の裡に国家意志が体现されなければ、それは空虚な意志にとどまるからである（同上、557 p）。したがって〈国民主権〉はあっさり否定される。

〈国民主権という言葉があるが、近年それについて論じられていることは、原則として、意味が曖昧である。……

国民そのものは、烏合の衆にすぎない（！）。だから国家という組織が必要不可欠であり、政府も存在するのだ。〉（同上、558 p）

哲学的であるべき国家の実態は、ヘーゲルのこの本を詳しく読んでも、いまひとつわからない。それがどのような制度をとるべきかは、この君主制の他には展開されていないからである。しかしそれはたしかに、強権国家にはちがいない。抑止機構としての三権分立が捨て去られているからである。その根拠は〈主権の単一性〉だった。

〈こうした区別（三権の分立）を最初に言い出したのはモンテスキューだが、そのような権力を別に（国家主権とはべつに）二つ立て、一方が他方を制約するというのは、根本

的な間違いである。……それでは国家の統一が破棄されてしまう。……国家は一つでなければならない。) (同上、563p)。

主権の単一性は、ホッブズ、ルソーの時代から、社会契約論、国家論の核心部をなしてきた。しかしそれは、国民主権、三権分立との融合の方向にはっきりと向かっていた(啓蒙期において)。まだ国民とはいわず、〈民族〉という言い方が主流ではあったものの、そこにおいては〈専制の抑止〉がコンセンサスとしてはっきり確立されつつあったのである(国家論において、法律論において)。それがどうしてこのようなことになったのだろう。

一つは、フランス革命に対する、ヘーゲル自身の深い失望感だった。しかしこの失望感は非常に特殊なものだった。ロベスピエールの恐怖政治は、強権への固執によって生まれたのではなく、むしろ強権の分裂によってひきおこされたとされるのである。

〈フランス革命の経過を見れば、国家統一の必要性は一目瞭然である。最初は国民議会が王と内閣から独立して実権を握っていたのに、そののち、総裁政府と立法議会が独立の権力基盤となった。このように二つの権力が並び立つと、どちらか一方が優位に立って、暴力的に他方を押さえようとする。〉(同上、563p)

これは史実に反する。立法議会(憲法制定議会)にすべての権力がまず集中し、それが〈指導者〉ロベスピエールへの権力集中をまねいたのだった。議院内閣制のような、抑止機構が皆無だったため、議会そのものがアジ演説の場と化していったのである(マチエ、ルフェーブルの革命史研究参照)。構造上、酷似しているのは、やはりあのボルシェヴィキによる〈一党独裁〉の姿である。そこにおいても、議会、党、国家は一元的に連続していた。抑止する司法、行政は皆無だったのである。

このヘーゲルの国家には、なぜか〈朕は国家である〉(ルイ14世)という、古風な専制の響きが伴う。そしてそれは、歴史的には、正しい理解なのかもしれない。モンテスキューの権力抑止の三権分立論は、まさに最盛期のブルボン朝が生んだ、特に法制での恣意性(彼自身高等法官だった)を眼前にしてのものだった。国家を全廃せず、権力を腐敗させず、自己抑止のシステムを内挿するという発想は、やはり専制国家の弊害を目前にしないと、そのアクチュアリティはわからない。そしてヘーゲルは、おそらくわからなかった。ドイツにあったものは、四分五裂の弊害、小国の官僚制、警察制の恣意的な横暴と、あらゆる社会生活の閉塞そのものだったからである。

おそらく税吏だった父の経験もどこかで生きていたにちがいない。度量衡や貨幣、関税といった基本的な経済生活ですら、ずたずたに分断されていたのが当時の現実だったからである(したがって統一への動きも、まず関税同盟という形で始まった)。まずなによりも統一、そしてそのための強い国家権力が囑望されていた、それをヘーゲルはこころの底から願い、期待している。そしてこれは、当時のインテリの中では、むしろ主流になりつつあった。ヘーゲル自身、その主流に乗り、それに〈哲学的表現〉をあたえたといってもよい。

しかしなんという統一であることか。

『歴史哲学』では、世界史は〈神義論〉であるとされる。神の義が世界史において証明され、実現されていくというのである。そしてそれはあいあらしい〈国家〉の悲劇でもある、とも。こうした〈ドラマチック〉な見方からして、啓蒙期とは全く異なる〈世界史〉像が呈示されることになった。そこではまず1. 人種の格差が論じられ、2. 奴隷制が是認され、3. 植民地主義は（特に市民社会における）必然であるとされる。

ヘーゲルは、哲学とは「自分の時代を思惟においてとらえたものである」とも言っている（『法哲学要綱』618p）。その意味では、こうした〈世界史〉モデル、ヨーロッパ至上主義的モデルから派生するゆがみは、やはり時代のゆがみそのものであったのかもしれない。たしかに彼のプロイセン的強権讃美は、〈時代の産物〉であった。彼自身の履歴において、まずそうなのである。たとえばこの〈総長〉の強権協賛的論文から、家庭教師時代の彼の国家観をふりかえってみると、そこにあるのは、目も眩むほどの懸隔である。

〈国家は純粋に機械論的なものである。しかしそもそも、機械というものには、精神的観念は付随しない。自由の対象となるものだけが、理念という名にあたいするからだ。ゆえにわれわれは、国家を超越しなければならぬ。国家は自由な人間をすべて機械の歯車として扱う。これこそまさにあってはならないことだ。ゆえに国家は死滅しなければならない。〉（ヘーゲル『ドイツ観念論の最古の体系プログラム』1796～97断片）

これは、ヘーゲルがもっとも〈啓蒙〉に接近した時の言葉だった。それはのちには、〈自己疎外的精神の世界〉であったとされる（『精神現象学』〈自己疎外的精神、教養〉）。ここでヘーゲルが何をイメージしていたのだろうか。それはフランス的教養の強制による自己形成の阻害ではないかと思う。

ドイツ語の、特にこの時期の文化運動のキータームとなった **Bildung** は自己形成と、その結果としての教養の二つのアスペクトを内包していた。動態と静態と言ってもよい。動態としてイメージされる時は、明るく、希望に満ちて、〈世界を遍歴しつつ自分を造りあげる〉イメージ、言ってみれば〈セルフ・メイド・マン〉の自律と明朗さがあつた。ゲーテの〈形成小説〉はこの主体性を基調としている。

主体性というのは、ヘーゲルのキーターム、もっとも重要な概念の一つだった。かれはしかし教養にはこの主体性を認めていない。それは客体であり、教養人を客体化する枷なのである。つまり啓蒙期の全体が、静態的、モザイク的な枷として青年期のヘーゲルにイメージされていたことは確実だと思う。したがってその〈吸収〉にかかる圧力、労力は莫大であった。カントの時代の達成そのものが、ばらばらの学説の巨大な山のように見えていたと言ったら分かりやすいだろうか。したがって、それを再び〈批判〉することだけでも大汗という以上の労力を有するのである。

実際に、青年期のヘーゲルは、そのほとんどの労力をカントたちの仕事の批判批評に費やしていた形跡がある。くわえて、啓蒙の本国、フランス的教養の圧力がある。ギリシア語、ラテン語には通じていたが、他のヨーロッパ現代語にはあまり通じていなかった、田舎のドイツインテリにとって、この理解し、読まねばならないものの総量は、やはり途方もなく巨大に感じたに違いない（ヘーゲルはまた、律儀な読書家で、読書ノートをきちんと

とつけながら、徹底した研究を続けていた)。だからこの〈教養〉に対する、莫大な距離感、自己疎外感も生じたのではないかと思う。

では彼の主体性はどこにあったのか。彼はどうやって、教養の自己疎外を回復したのか。ほかならぬ『精神現象学』にその記録がある。教養世界の分裂に苦しんだ〈精神〉は、その苦しみを自省することによって、〈自己に回帰する〉。彼は精神となったのである。

〈自己意識は、そのまま自己自身を一般的な形で確信しており、この関係のうちに、自らの純粹意識を保っている。ゆえに、この関係においても、やはり真理と現在、そして現実とが統一されている。二つの世界は和解しており、天上は地上に移される。〉(同上、〈啓蒙の真理〉、336p)

この〈自己意識〉の〈自己〉は、〈啓蒙〉での遍歴をやめた直後のヘーゲル自身の状態を映し出していると思う。〈和解〉はなにに対しての〈和解〉なのかを理解することが肝要である。それは自己の教養遍歴のみじめさ、その疎外を認めること、そしてその疎外を終えて、自己をそのままの状態、〈現実〉として認めることであると思う。その〈現実〉には、貧困な、分断されたドイツの現実も含まれていた。彼は現代ドイツ人なのである。そして本当の〈回帰〉が生じる。そのドイツ的貧困の中にある、〈人倫〉が輝きわたる。

〈絶対的自由は(※自己観照によって自由となった若きヘーゲルは)、自己自身を破壊する現実から出て(※啓蒙的教養の束縛を捨て)、それとは別の自己意識的精神の国に移る。〉(同上、343p)

つまり……ドイツに移る。ドイツには自意識過剰の、フランス的、啓蒙的教養の圧迫に苦しむ青年がたくさんいた。その自意識を思想へと高めねばならない。その時、精神は新たな可能性を発見する。

〈この国で、絶対的自由は、この非現実そのものの中で真であると是認される。そしてこの真理を思惟することによって、そしてその思惟にとどまる限りにおいて、精神は活力を回復し、自己意識のなかに閉じこめられた存在こそ、完全で十分な本質であると知るのである。つまりここに、道徳的精神という、新しい形態が生じる。〉(同上、343)

これはなにを言っているのか。貧しいドイツを見渡すと、その貧しさの中に、その故に、人々のエートス、道徳的生活が輝き渡っている、そのことを、フランス的啓蒙に背を向けた青年ヘーゲルは、〈真理〉として把握したのである。

こう生活の言葉に翻訳してみると、それ自体、なにかあまりにわかりやすく、そして多少ばかばかしい。わたしたちの現実感覚からしてばかばかしい。つまりフランスの教養の圧力に大汗を書いて、もうやめた、ドイツでいいと思ったら、ドイツ人もすてたものではないように見えた、というのなら……それはもう、乱読青年のぼやきであって、〈大哲学〉ではない。

しかしそれは、やはりそのまま〈大哲学〉なのである。それはヘーゲルに固有の（本当に彼のみオリジナルな）、〈定有〉（Dasein）に対する感覚、個物と、個物の位置する現実に対する感覚がある。つまり個物は、普遍の否定であるという意味において、すでに弁証法を秘めているのである。普遍から普遍にいたる道には、この〈自己否定によって運動する〉弁証法がない。これがすべての理解の鍵である。そしてそこから、次のような、きわめて印象的なモデルが生じる。

〈つぼみは、花が咲くと消えてしまう。そこで、つぼみは花によって否定されると言ってもよい。同じように、果実によって、花は植物における偽であると宣告され、植物の真としての果実が花にとってかわる。これらの形式は、互いに異なっているばかりでなく、互いに相容れないものとして斥け合う。しかし、これらの形式は、流動的な性質を持っているため、同時に有機的統一の契機となる。この統一にあっては、形式はたがいに敵対しないばかりか、一方は他方と同じように必然的である。この等しい必然があってはじめて、全体としての生命が成り立つのである。〉（『精神現象学』〈序論〉16 p）

この有機的生命のモデルは、そのまま〈精神〉へと適用される。精神は時間の中に咲き誇る花なのである。あるいはたわわな実、どちらでもよい。ただ全体でさえあれば。

〈精神の全体だけが、時間の中にある。そして精神の全体そのものの形態であるような形は、継起する時間の流れのうちに現れる。というのは、全体のみが本来の現実性を持つからである。それは他在に対し、純粹自由の形式をもっており、時間そのものとして現れる。〉（『精神現象学』〈宗教〉、385 p）

この〈時間〉を〈歴史〉へと拡大すれば、〈精神の自己実現としての世界史〉が見えてくると思う。その全体的見地からすれば、あのフランスに背を向けてドイツを再発見した青年も、その偏狭さ、依怙地さのままに、〈精神の階梯〉の一つなのである。

『精神現象学』は実に不思議な哲学書で、こうした寸景にも、思い切り卑近な現実と、壮大雄渾な哲学的真理が並存している。あるいは重ね合わされている。優れたヘーゲル解釈者であったイッポリットは、この二重性を〈二重の課題〉として定式化している。すなわち、まず純粹意識の現象学がある。そこでは経験的意識が絶対知に自己形成していく過程が描かれる。しかしそれは同時に、その純粹で個別的な自我が、「自分のうちに、その時代の全精神を包括する自我へと移行する」その有様を描くことにもなる（イッポリット『ヘーゲル精神現象学の生成と構造』、上53 p）。それはその意味で、「個人意識の中で想起された世界の歴史」ともなる（同上、59 p）。なぜ歴史なのか、それは歴史が個物のなかへと疎外された世界精神の歩みであるからである。歴史とは、その意味で、世界精神の自己実現なのである（『歴史哲学』序文）。

すべての個物は、こうして普遍へとすくいあげられ、〈和解〉するのだが、その〈和解〉は、個物、定有の自己否定なしには行われぬ。死の棘はあらゆるところにあり、それを

乗り越えていくことのみが、普遍へと至る道である。こうして、〈悲劇〉は〈受難〉と融合する。

しかし、どこかで、この〈悲劇〉は止めねばならない。

卑近な例をあげよう。

ブッシュ・ジュニアは、イラクの情勢が悪化していくと、ほとんどすべての反駁、反論を一言で片付けた。「そう、それは悲劇です。わたしもそう思います。」

十九世紀の真の「悲劇」、人間性と人倫性に対する冒瀆は、奴隷制と植民地主義の収奪に尽きたと思う。そしてそれはすでに、ヘーゲルの『歴史哲学』に内包され、肯定されているのである。

〈これまで黒人をヨーロッパ人に結びつけていたもので、今日もなお続いている唯一の本質的な関係は、奴隷の関係である。実際、黒人はこの奴隷制をべつに許し難いものだとは思っていない。それどころか、奴隷売買と奴隷制の廃止のために尽くしてきたイギリス人こそ、黒人自身に敵視されているのである。なぜなら、黒人の王にとっては、彼が捕虜にした敵はもちろん、自分の臣下さえ奴隷に売ることが一つの重要な仕事であるからである。しかしまたその限りで、一般的に言えば、奴隷制度はかえって黒人の間に人間的な感情を旨めさせることにもなったのである。〉(ヘーゲル『歴史哲学』〈序論〉、上209p)

アメリカで奴隷制が完備されていくのは、まさにヘーゲルの時代だった。反奴隷制の運動もイギリスを中心に展開する。それを見ている「哲学者」のヘーゲルは、まるで……単純素朴なジンゴイストの口調で奴隷制の〈必然性〉を説く。なんど読んでも、まったくがっかりさせられる。近代における哲学のボトムの一つがたしかにここにはある。奴隷制が是認されるならば、もちろん植民地主義は〈世界史的必然〉だった。

〈古代においてはアレクサンドロス大王が、はじめてこの地に(※東洋、オリエントに)侵入することに成功した。もっとも、彼はただこの地に少しだけ足を踏み入れたにすぎない。ところが近世のヨーロッパ人は、背後から迂回して、つまり前述したように、あの一般的に言って国々を結ぶ媒体であるところの海を通ることによって、はじめてこの夢の国(※インド)と直接に関係を結ぶことができたのであった。イギリス人、というよりもむしろ東インド会社が、いまではこの地の支配者となっている。実際、ヨーロッパ人の支配下に入るといふことは、アジアの国々の必然的な運命であって、その点では中国も、いつかは同じ運命を辿るに違いないのである。〉(同上、第一部〈東洋の世界〉、上、277p)

これはつまり、端的に言って、弱肉強食期に入ったヨーロッパの、〈国体論〉である。なぜ〈国体論〉かというと、国家をも民族をも超越した、世界外的原理がここには導入されているからである。家産国家型国家論への先祖返りなのである。国家外、世界外に置かれた原理、それは〈人種〉という原理だった。勝者でありさえすればよい。そうすれば〈世界〉は勝者にとって分捕り放題となる。それを「哲学者」ヘーゲルは完全に肯定している。そこに悲劇が生まれるならそれでよい。世界史はもともと悲劇含みなのだと。

「国々を結ぶ媒体であるところの海」、この言葉が結局開港圧力のメカニズムそのものである。わかるように、これがまたペリー、パークスを日本に向かわせた根本の動因だった。彼我の力の差がどこにあるか、「分捕り放題」なのか、それとも「折衝」が必要なのか、それを見極めようとして最新式の蒸気駆動軍艦を向かわせた。ここにはいかなる美辞麗句も通用しない、裸形の弱肉強食と〈人種〉イデオロギーがあるということ、そのことをけっして忘れないようにしよう。

それにしても、ほとんど卑近な、噂話の調子で、こうした種族的ジンゴイズムが語られる。そしてそれが〈世界史〉という、近代哲学で最大のパラダイムの一つと結びつけられる。唾然とするのはわたしだけだろうか。この卑俗な調子がやはり本当の問題だと思う。つまり、薔薇と十字の崇高な比喻（『精神現象学』）の帰結が、こうした反啓蒙に終わるとしたら、崇高であれ卑近であれ、やはり根本のなにかがおかしかったと考えるしかない。なにがおかしかったのか。

わたしは、端的に、自己肥大であると思う。そしてその自己肥大は、神学的な響きを伴う。汎神論よりは、むしろ……神の代理人としての大審問官に近いかもしれない。

おもえば、宗教戦争の悲惨が生々しく残るバロック初期の現実の中で、コギトと理性を発見したデカルトや、国家創出の〈技術〉を発見したホップズは、このエゴ肥大の最初の犠牲者だった。犠牲というのは、彼ら自身、〈理性の暴虐〉のようなものに、つねにさらされていたことが、そのテキストのあちこちに透けて見えるからである。たとえばデカルトの有名な〈欺く神〉もそうであるし、ホップズには〈暗黒の王国〉に対する強い恐怖感があった。そしてそれは〈論理的必然〉に見える瞬間がたしかにあるのである。かれらにおいてもそうだっただろう。

カント的な啓蒙世界が、ばらばらの断片に見えた時、青年ヘーゲルのころには、〈気楽なおしゃべり屋〉の像がつねに浮かんでいたにちがいない。『ボヴァリー夫人』にオムという、耐え難い田舎のなんでもや、おしゃべり男が登場するが、あれが産業ブルジョワジーにおけるディドロの裔であり、ヘーゲルの窒息感もそれを予告している。しかし……『歴史哲学』や、『法哲学』の、だらしないおしゃべり、偏見そのものを楽しんですらいるかのように思える人種論や、植民地主義、奴隷制の是認は、オム以上のオムである。ばらばらになっていったのは、カントたち啓蒙精神ではなく、むしろ完成された歴史哲学者であったはずの、世界精神を具現したはずの、老ヘーゲルその人だった。

これは〈体制へのすりより〉というレベルの問題ではないと思う。なにかより本質的なこと、人文精神の〈胸をかきむしるようなこと〉、本当の悲劇が起きていた気がする。

それはつまり、あらゆる定有、あらゆる個物が、あらかじめ〈和解〉の免罪符を与えられてしまったからではないか。そうわたしは直感する。

上に言った二重性にもう一度戻るなら、貧困なドイツの貧困な青年の郷土愛に、世界史の必然、精神の自己発展の過程を認めることは、〈対立物の調和〉に似た、ふしぎな慰めをあたえた。ヘーゲル自身だけにでなく、同時代の読者、聴講者もそう感じたに違いない。異国の、違う時代のわたしですら、そこに本物の〈哲学的慰め〉を感じる。しかしこの慰めは、エゴの肥大、そしてストレートに言ってしまうと、肥大のあげくの錯乱と紙一重だったと思う。それは、理性主義に最初から内在していた、理性そのものと、この内省する

わたしの一致、融合の深遠であるという意味において、近代的定位が最初から背負った十字架であると思う（この比喻も実体的な重みをもつ）。

カントはこの深淵を知っていた。そして〈真の意味の哲学者はどこにもいない〉と言い切った。ソクラテスの〈愛知〉の精神にもどったのである。哲学者は、理想においてしかない。それは人間の認識の限界を破ろうとする、そのことが哲学の本題となってきた、そのことをカントが敏感に感じたからだった。それにたいして、個我は人倫において、自由を立法と直結する。善くあろうとすることは、範疇的に、絶対的に善くあろうとすることであり、そうした個我は、相互是認の〈人々〉の中にいた。そこには肥大はない。等身大の〈世界市民〉がいるだけである。そのことにカントは全身が震えるほどの感動、賛嘆、畏怖をおぼえた（『実践理性批判』の結論部）。

そうしたカントの世界を、〈批判に対する批判〉の対象としてだけ、青年ヘーゲルは見ている。その時見逃した「人倫の自由」は、〈人倫主体としての国家〉となって、彼に復讐する。それは彼に対する、思弁的理性に対する復讐であると思う。国家が人倫の主体となったとき、思弁にやるべき仕事はもう残っていない。人々は、もはや法律の関数になってしまったからである。そこには、本当の意味での自由も人倫もなくなってしまった。そして国家は〈自由に〉、「ああ、それですか、それは悲劇です」とくりかえすだけである。

ヘーゲルの国家論のドラスティックな機能不全、その本質的な「非・人倫性」は、やがて科学理論によって、根拠づけられることになる。その理論は「悲劇」とは言わないで、「淘汰」と言った。

こうして強権国家が、社会的ダーウィニズムによって「科学的に」根拠づけられた時、疎外された人倫は、秘密結社の強い仲間意識へと変容する。アナキズムとテロの時代がやってきたのである。

それもまた〈世界史の必然〉であったとはするまい。

〈世界史の主体〉のなにかが、決定的に狂ってしまったのだと思う。それはロベスピエールの〈至高存在の祭典〉が、いかにヘーゲルの〈世界精神〉に近かったか、そのことを思えば、病根のありかだけはわかるとわたしは感じる。

つまり、エゴが、そのエゴにとって耐え難いほど、肥大し、世界史の極大の十字架からはがれおちたのである。

あとにのこったのは、オムと、老ヘーゲルの無駄話だった。

世界の哲学史でも、まれにみるアンチ・クライマックスの記録がこうして残ったのだった。『法哲学』と『歴史哲学』として。

開港のパラダイムとして、〈世界史〉はすでに〈文明化〉と融合している。この内的過程もまた、ヨーロッパにおける〈文明化〉の優越、そしてそこから派生する非・ヨーロッパ圏との拡大しつづける格差と不可分の関係にある。その場合、文明イデオログたちは、やはり歯止めの利かないかたちで〈肥大したエゴ〉を体現していたことが確認できる。つまり文明、非・文明の対峙においては、かれらはすでに家産国家型イデオログへと退行していたということであり、したがってその行動型はつねに支配と「分捕り放題」の妄想へと向かう趨勢を見せた。つまり彼らはやはりヘーゲルの子供たちだったのである。

それにもかかわらず、かれらが開港の現実において、それ以外の行動、折衝を余儀なくされたとすれば、その点にこそ、維新幕末史の主体性、そして彼我の圧倒的な差異を埋めるべく行動する近代草創期の日本人の力量のようなものを認めざるをえないだろう。「ざるをえない」というのは、こちらがわにおいても、家産国家型の英雄妄想というものがあって、「精神主義が物質主義に勝った」などというクリシェーを用いたりするので（鷗外の『かのように』の五條子爵もこのイデオロギーに「はまって」いたことが想起される）、それに陥らないように、批判意識をたもった上で、しかし事実としてそうだったということである。それが具体的にどういう様相を呈したのか、そこに今現在のわれわれはまだ何か学ぶべき点があるのかないのか、それは次章で検討することにしよう。ともあれ今は、開港のパラダイムの最後のモジュール、進化論を検討しておく必要がある。

(近代本論第十二回テキスト終わり)